



Title	特集1 哲学をいかに開業するか? : 第6回哲学プラクティス国際会議・オスロ報告
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 9, p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9203
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1

哲学をいかに開業するか？

第6回哲学プラクティス国際会議・オスロ報告

「哲学プラクティス Philosophy in Practiceは、(いわゆるアカデミックな哲学でいう「実践哲学 practical philosophyとは異なり、) 弁護士や医者が街で開業するように、哲学者が大学や研究機関から街に出ていき、人々と様々な仕方で交わり、そこで人々の抱える問題に関わる活動一般を意味する。代表的なものとしては、プラクティスの創始者ゲルト・アーヘンバッハが行っているように、(主に自宅で)訪問者に対してカウンセリングを行うことである。しかし現在、ドイツ語の“die philosophische Praxis”から“Philosophy in Practice”として英語やその他の国の言葉に翻訳されるにしたがって、哲学プラクティスの意味と活動の幅は広がり、哲学カウンセリングのみならず、哲学カフェ、哲学ディナー、コンサルティング、子どものための哲学、ソクラティック・ダイアログなど、もともとは哲学カウンセリングとは別の流れとしてあった様々な哲学の実践の総称として考えられるようになったようだ。しかしこうした形態の多様さとは別に、基本は極めて単純である。形式が1対1、1対多、多対多であっても、あるいは対象が個人、組織、子ども、大人であっても“対話”を行うことにある。

このような(広義の)哲学プラクティスの試みは臨床哲学の活動とも関連が深い。臨床哲学のメンバーが哲学プラクティスの国際会議に出席するのも今年で3回目となり、徐々にではあるが以前よりこうした活動への理解の奥行きと広がりが増してきたように思われる。特集1では、オスロでの会議(テーマは“Philosophy in Society”)の様子をダイジェストでお伝えしたい。